

パプア・ニューギニア，ラエ市の移住者集落

田 島 康 弘

(1990年10月15日 受理)

Yasuhiro TAJIMA

第1章 研究目的

第三世界の都市一般と同様に，パプア・ニューギニア（以下 PNG と略す）の諸都市における近年の人口増加は極めて急激であり，ラエ市もその例外ではない。この増加した人口の大部分は国内農村部に起源を持つ人口であり，彼らが都会に来て直ちに直面する問題が，住むところと仕事である。一般に彼らは既に都会に居住しているワントーク¹⁾をたよりに都会に出て来ると言われており，はじめはそのワントークの家に寝泊まりすることになる。従って，都市内において現地人の住むあらゆる地区に彼らが住み込むことになるが，CBD やそれを取り囲む中心部の高級住宅地に住めることは稀で，彼らの大部分は都市周辺部の urban village²⁾ 周辺やノー・カベナント地区に settlement³⁾ を形成しそこに居住しているのである。彼らの居住状態は極めて劣悪で，狭い部屋に多くの人間がごろ寝をし，ひどいときは家の床下に寝ることまであるといわれる。(相原氏の話)⁴⁾ 他方，仕事の方も容易には見つからないという状況もある。こうした状況が治安の悪さの背景にあり，我々の調査時点においてもカフュー（夜間外出禁止令）が敷かれていた。これほどひどい都会生活の状況であるにもかかわらず，なぜ彼らは農村から出て来るのであろうか。そこには，彼らの農村生活の実状がある。すなわち，小学校程度とは言え多少の教育を受けた若者達にとって，現在の農村生活はあまりにも魅力のない場所となっているようである。ここでは特定のいわゆる「仕事」をしなくても，周囲の自然物の狩猟や採集によって生活——生きること——が可能ではあるが，車，買い物，娯楽など近代文明の諸々についての情報を既に獲得した彼らには，都会は極めて魅力のあるところと映っている。また，密集居住とは言え，ノーカベナント地区の urban settlement における水（水道）の存在は，生活条件としても都会の生活のしやすさを生み出していることも指摘できよう。

ところで，一般に移民の研究課題には，ホワイトとウッドによれば，次の五つがあると言う。

1) 移住距離， 2) 移住期間， 3) 出発地と目的地の環境， 4) 移住の理由， 5) 移住者の属性。

また、とくに PNG を対象とした研究動向から、次の2つの研究方法についても注目しておきたい。その1つは、農村に調査拠点を据えて、そこに住む人々の出郷状況を調べる方法である。その代表的論文に、グロニンゲンのものであり、ウェストニューブリテンのキレンゲ村の移住について検討したものである。もう1つは、都市部の settlement に調査拠点を据えて、その住民を対象に調査する方法でチャオ女史のポートモレスビー9マイル集落を対象とした報告は、この代表的なものと言えよう。

本報告ではホワイトとウッドの諸課題をふまえた上で、今回は都市部を拠点とした調査方法により、実態把握と問題解明にできる限りせまりたいと考えている。農村部からの移民研究については今回は行うことができなかったが、今後の課題としたい。

さて、こうした移民研究、さらには都市化の研究の最終的な目標は、やはりよりよき社会へ向け方向性を模索すべく、その社会で生じている事態の本質を理解することにあるだろう。ただそのためにも、生じている客観的事態を事実在即してできるだけきちんと捕らえることが必要であり、本報告もこうした移民や都市における segregation⁵⁾ の事態の整理と、いくつかの問題点を検討することにその目的がある。このため、第2章では事態把握の前提として、ラエ市の発展過程と都市構造の特色の把握に努め、第3章では選択した2地区の調査結果を提示し、第4章で事態の考察や若干の問題点について検討することにした。

第2章 ラエ市の発展と移住者

第1節 PNG の都市の特色

まず、PNG の都市に共通する、2～3の特徴について指摘しておきたい。

その第1は、PNG の住宅地が、1) ハイ・カベント 2) ロウ・カベント 3) ノー・カベナントの3つに区分できることである。PNG においては、伝来の土地の個人的売買は許されておらず、政府が都市部において伝来の土地を買上げ、それをこれら3種に区分しているのである。このうち1)と2)は Land Board (土地省) の管轄下であって、それぞれそこに建てられる住宅の建築費及び地代に一定の制約がある。これを具体的にみると、Land Board により毎週発行される近年の「ガゼット」(1989.6.22号)によれば、ポートモレスビー、ホホラ地区の貸住宅の例で、ロウ・カベナント地区で建てべき住宅の値段は2000～5000キナ、年間地代が50～125キナであり、ハイ・カベナント地区ではそれぞれ16000～20000キナ、625～1000キナなどの例が載っている。これらにたいし、3)のノー・カベナント地区は Urban Developing Office の管轄下であって、このような制約は全くなく、どんな住宅を建ててもよいことになっている地区である。

一般に、PNG の都市構造は、中心部に CBD、空港、工業地区などが存在し、その周囲を住宅地や公共施設などが取り囲むという形が多く、住宅地内部では、中心部の CBD の近くにハイ・カベナントが、その周辺に open space や学校などの公共施設があつて、その外側にロウ・カベナ

トがあり、さらにその外側にノー・カベナントが展開するというパターンが一般的である。ところで、これらの地区の居住者についてみると、先に示した制約条件から、ハイ・カベナント地区には、現地人が個人として入居することはほとんど不可能であり、政府の借り上げ住宅や外国企業借り上げ住宅の外は、事実上外国人に入居が限定されている。他方ロウ・カベナントになると、現地人の中でも手が届くものも生まれる。それは建てるべき住宅が先に示したように、ハイ・カベナントの8分の1～4分の1、地代も10分の1程度であるためである。しかし、首都やラエ居住者の圧倒的多数は、これらの住宅地に住んでいるのではなく、第3のノー・カベナントに居住しているのである。これについては第三の特色として後に述べよう。

第2の特色は、地方からの移住者（都市内流入者）が都市内部および周辺地区に非常に多いということである。彼らの居住地区は一般には settlement であると見なされているが、こうした地区だけでなく、urban village 内やロウ・カベナント地区にもワントークを頼りに居住しているのが実態である。従って、Jackson 氏の言うように、こうした settlement と urban village とは同じような問題を抱えているのはたしかではあるが、village の方に相対的「安定性」があることも否定できないように思われるし、古くからの集落と近年の移住者により成立した settlement とを同一に扱うのは、問題点を整理する上では適切とは言えないであろう。第3世界の都市一般では、こうした移住者による集落は squatter settlement といわれている。しかし、squatter の持つ意味が「無断で居着く人」という意味であり、PNG の場合には一般に土地の伝統的所有者の同意を得ていると言われているので、「squatter」は確かに文字通りの意味では正しくなく、自然発生的集落等と言い換えて呼ぶことも一理ある。また、migrant settlement という言葉についても、一方ではこうした集落の内部においてその集落で生まれた2・3世も多く、彼らは migrant でないことや、他方において、これらの settlement 以外の都市の諸部分にも migrant が多いことなどから、不適切と言う意見もある（Jackson）。しかし、こうした事実も踏まえた上で、urban village と区別する意味で、migrant settlement（都市の移住者集落）という概念を使っても差し支えないと筆者は考えている。

土地所有について触れておくと、まず urban village については言うまでもなく、古くからの居住者達にとっては自分達の伝来の customary land⁶⁾ 上にあるので問題はない。移住者集落については、government land と customary land の区別無く双方に存在し、customary land の部分は契約者（古くからの居住者達）に地代を払うが、government land の部分は実際には地代を支払わない（支払えない）ケースも多いようである。また、政府有地はかつてオーストラリア植民地時代に、首都やラエその他の都市部において、植民政府当局が地元民から購入した土地が主であり、近年では政府によるこうした土地の購入は非常に困難になっている。

第3の特色は、こうしたノー・カベナントまたはその他の地区における移住者の居住状況に segregation の傾向が強く見られることである。

小さなノー・カベナント集落の大部分は、地方の一つの特定の地域あるいは特定の村の人々から

成っていたり、大きなノー・カベナント集落でも、その内部で別々の出身集落グループにはっきりした一線で別れて居住しているといわれる状況である (Jackson)。彼らの都市への移住において、同一のワントークをたよりに移住すること、民族間、部族間に一定の緊張関係が存在することなどが、これらの現象の背景にある。ここで彼らの居住状態についてふれておくと、前述のように政府の役人には政府の住宅があり、政府の expatriate⁷⁾ や私企業の社員にはこれらの機関から住宅が与えられるが、これら以外は個人で自分の家を捜さねばならず、圧倒的多数はノー・カベナント地区に居住する。この同じノー・カベナント地区でも、都市域の内部では水道、電気、ごみ処理、下水などの都市的諸設備が存在し、生活の利便さ (特に水道) を有するが、これらの費用が支払えないものも多く、そうした人々は追い立てを受けることになる。他方、市域外では追い立ての心配はないがこのような都市的諸サービスは存在しない。こうしたジレンマを持つことが彼らの居住状況の一つの特色である (Jackson)。彼らの都市生活の別の問題は、彼らを頼って地方からやってくる同郷人の来住、同居が絶えないことである。狭い部屋に雑魚寝をするが職はなかなか見つからず、しまいには交通費を支払ってまで数カ月後かに村に帰ってもらうというケースも少なくないと聞く (相原氏の話)。その人が村に帰ったというニュースを聞くや否や、また次の人が訪ねてくるという状況が繰り返される。村と違って都会では働かなければ生きていくことができず、家屋所持者には普通一人か二人の wage earner がいる (Jackson ほかの調査による) と言われているが、彼らの給料はこうした人々のために使われてしまい、生活は非常に苦しい (ポートモレスビー9マイル集落のチャオ氏による調査参照)。

第2節 ラエ市の発展と都市構造

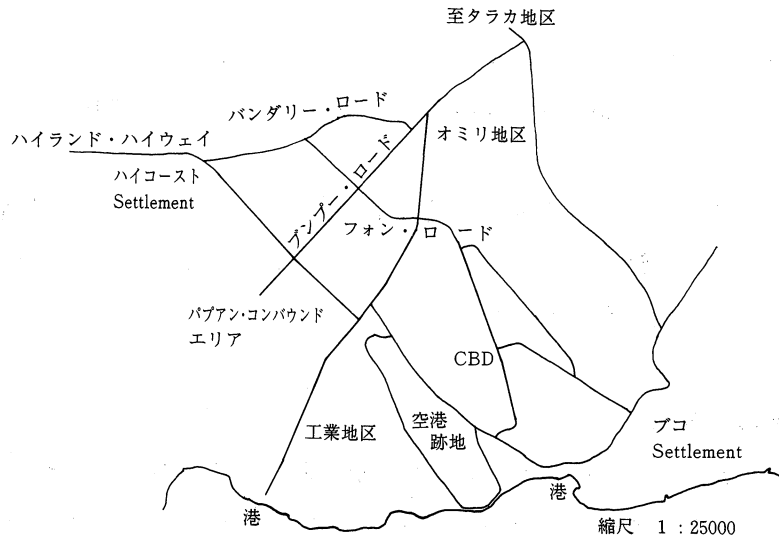
本節ではラエ市における流入人口の増加と Segregation について、より具体的にみよう。

1. ラエ市の特色

ラエ市は PNG 全土のほぼ中央に位置し、1980年センサスにおいて61617人の人口を擁する首都に次ぐ PNG 第2の都市である。ラエ市の発展は後背地とのつながりの拡大と共に進んできたと言え、1955年ワウ地方とを結ぶマーカム橋の完成、とくに1962～3年のハイウェイの開通によるハイランド地方との結び付きによって、人口の急増が見られるようになった。また、他都市と比べ工業が比較的発達しており、1980年の製造業人口の割合は14.7%でプロロに次いでこの国第2位である。ラエの市域は政府が買い上げた土地の範囲とほぼ一致しているが、近年の人口増加はこの外側で顕著であり、センサスによるラエ市の境界は、これらの urban settlement を含めた、より広い範囲がとられている。

2. ラエ市の空間構造

次にラエ市の都市構造を見ると、CBD は北部を除く周囲を崖で囲まれた丘の上にあってはっきり区別されており、ここには行政機能、事務所、娯楽施設、ショッピングセンターなどが存在する (第2-1図)。同時にここは、ハイ・カベナント住宅地の1つでもある。もう1つのハイ・カベ



第2-1図 ラエ市の空間構造

ナント地区が、CBDの北方のブンブー・ロードとフオン・ロードの交差点を中心とした半径1 kmほどの地区にあって、この中心部にももう1つのショッピングセンターが存在する。他方、ロウ・カベナント地区は、1) CBDの東側、2) 市域西部の工業地区の西方、3) オミリ地区の3カ所にみられ、それぞれの周辺の一部に若干のショッピング施設が見られるが、娯楽施設などは存在しない。このほかCBDの西方には旧空港跡地が、さらにその西方には工業地区があり病院・学校・植物園、ゴルフ場等の諸施設も、比較的中心部近くに存在する。

3. Urban Settlementの発達

以上のものがほぼ市域部を構成しており、近年の人口急増地区である urban settlementはこの外側に存在する。その代表的なもの1つがプロ Settlementとバンダリー・ロード Settlementの2つである。プロの人口は1963年の400人以下から1974年3000人以上、1980年4000人以上と増加しており、又、バンダリーも1963年の100人程度から1974年には1700人へ、近年はその数も増していることは確実である。この2地区の他、西方のハイウェイ沿いのハイコースト Settlement及び北方のタラカ地区の人口増加も筆者の観察では顕著のように感じられた。

4. Segregationの形成

次に Segregationの傾向についてみよう。

- 1) まずロウ・カベナント地区の1つにパプア人の集中する Papuan Compound Areaがある。彼らの流入時期は1950年代の末から60年代の初めでかなり早く、職も技術を持った職人的仕事であったために、この地区に居住しえているのであろう。また、パプア人は他のロウ・カベナント地区にも居住している。
- 2) 次にセピク出身者はもっぱらプロ Settlement特にその南半部に居住しており、典型的な Segregationが見られる。
- 3) ハイランダーについてはバンダリー・ロード Settlementに多く1部はハイコースト地区にも見られる。

4) モロベアンについては市域全体に分布しており、Segregationの傾向ははっきりしないが、メミヤミヤがハイコースト Settlement に、ムメンがバンダリー・ロード地区にそれぞれ多いとも言われている。

市の政策では、これらの各 Settlement の内部に商店やさらには現地人の企業を設けることにしているが、実際にはなかなか難しいようであり、ブコ地区では、近くのチャイナタウンの商業地区の存在がその集落形成に有利に働いている。

第3節 ラエ移住者の出身地

それでは、ラエ市の都市人口の中の流入者はどこから来たのであろうか。ラエ市の人口から非市民人口（外国人人口等）の4499を引いた57118人の出身県別割合をみよう（第2-1表）。

第2-1表 ラエ居住者の出身地

出生地	人口	割合
Western	191人	0.3%
Gulf	705	1.2
Central	1,337	2.3
N.C.D.	1,414	2.5
MilneBay	1,147	2.0
Northern	1,391	2.4
S.Highlands	464	0.8
Enga	481	0.8
W.Highlands	928	1.6
Chimbu	2,916	5.1
E.Highlands	3,822	6.7
Morobe	33,720	59.1
Madang	2,455	4.3
E.Sepik	2,866	5.0
W.Sepik	399	0.7
Manus	555	1.0
N.Ireland	367	0.6
E.N.Britain	1,195	2.1
W.N.Britain	305	0.5
N.Solomons	376	0.7
Total	57,118	100.0

資料: National Census (1980)

ラエの存在地である Morobe が6割近くを占めて、飛び抜けて多いのは Morobe がラエに最も近いことのほか、古くからのラエ市域内居住者や、市域内で生まれたものをも含むのであるから当然である。これを除くと、E.Highlands が最も多く、Chimbu, E.Sepik, Madang などが多い県となる。また、パプアの出身者も N.C.D., Northern, Central など少なくない。これにたいし、島嶼部出身者は E.New Britain に多少多いが、他はかなり少ないと言えよう。以上をもう少し巨視的に見ると、モロベが6割、次いでハイランドが1.5割、パプアと北部諸県がそれぞれ1割、島嶼部が0.5割となり、遠方からの移住者としては 1) ハイランダー 2) パプア人 3) 北部諸県人

などが出身者の多い地域ということになる。

第4節 経済活動について

本節では、第3章に入る前提として、ラエ市居住者の経済活動について、センサスから促えておきたい。第2-2表は10歳以上の総人口の、経済的側面から見た活動状況を示している。この表の中で金銭的収入のある活動は1から4までであり、その割合は41.7%にすぎない。これを除くと報酬のない家内労働（例えば家庭の主婦など）20.2%，学生16.7%などが目立つ。また、金銭的収入のある活動の中で、商業や農漁業などの自営的職業が3.2%と非常に少ないことが一つの特色であると言えよう。また、これを男女別にみると、男子では収入のある活動は58.2%と6割近くに達するが、女子では16.2%とかなり低く、女子では家内労働の51.0%が目立っている。即ち男子は受給者、女子は家内労働というパターンが一般的なようだ。

第2-2表 10歳以上人口の経済活動

経済活動	男	%	女	%	計	%
1. 受給者	12909	53.9	1954	12.5	14863	37.4
2. 休暇中	347	1.4	72	0.5	419	1.1
3. 商業	584	2.4	136	0.9	720	1.8
4. 農・漁業（販売）	216	0.9	335	2.3	571	1.4
5. 農・漁業（自給）	340	1.4	459	2.9	799	2.0
6. 学生	4474	18.5	2155	13.8	6629	16.7
7. 家内労働	60	0.2	7972	51.0	8032	20.2
8. 老人・子供など	786	3.3	750	4.8	1536	3.9
9. 失業中	1398	5.8	291	1.9	1689	4.2
10. その他（非求職）	2792	11.6	1292	8.3	4084	10.3
無記入	215	0.9	194	1.2	409	1.0
合計	24121	100.0	15630	100.0	39751	100.0

次に、男子の収入のある活動の中のさらに具体的な内容を見ると、第2-3表のようになる。このうち7・8・9はいわゆるブルーカラー的なものであり、これが56.4%を占める。また、4・6の中には自営業者とそこに働く労働者との双方を含むが、自営業者の割合はそれほど多くない。1は医師、教師などであり、これと2とは最も安定した職と言えよう。5は掃除人、調理人等と軍人を含み、後者は40%以上を占める。以上のように収入ある活動の中身は極めて多様であるが、やはりここでも自営業的な仕事が少ないという指摘ができるであろう。

第2-3表 男子「収入ある者」の職業

職業	人	%
1. 専門技術職	800	6.3
2. 政府役人	319	2.3
3. 事務職	1506	10.7
4. 商業（セールスマン）	1178	8.7
5. サービス業	1720	12.2
6. 農林漁業	403	2.9
7. 生産労働者	5068	36.1
8. 交通労働者	1406	10.0
9. 単純労働者	1454	10.3
記入無し・無効	122	0.9
合計	14056	100.0

第3章 流入者居住地区の実態

第1節 調査2地区の概観

筆者は、都市流入者の実態をより具体的に実際に即して把握するために、ラエ市の2地区を選択して、実態調査を行った。本章ではその結果を述べてみたい。

選択した2地区はいずれも古くからの urban village ではなく（前述のように、ここにも近年流入者の増大が見られるが）、ラエ市の発達過程の中で流入者によって形成された居住地区である。その一つは市域内にあり、流入時期では比較的古い時期に属する市域西部の Papuan Compound Area であり、もう一つは流入時期がこれよりは新しく、市東部境界に隣接する Buko Settlement である。1980年代においては、市境界隣接地区およびこれより外側とくにハイランド・ハイウェイ沿いなどが流入人口の増加が顕著な地域であると思われるが、このハイランド・ハイウェイ地区の調査については行いえなかった。調査した2地区については県庁のリサーチ・オフィサーから各地区のリーダーを紹介してもらい、リーダー本人およびその地区の住民各10人程度ずつからそれぞれ聞き取りをした。

次に、調査2地区の概要を主にリーダーからの聞き取りによって（および文献により判明することも含め）とらえておこう。

1) Papuan Compound Area (以下P地区と略す) の概要

パプア人はポートモレスビーには多いが、ラエには少ない。このP地区はラエに少ないパプア人が最も集住している地区である。リーダーのジョン・サルファ氏からの聞き取りによれば、彼らの出身はガルフ島のケレマ市（1980年センサス人口3389人）及びその周辺のトアリピであり、とくにレセ地方出身者が多いという。彼らは先ずポートモレスビーへ次いでそこからさらにラエへと移住してきたのである。現在のP地区におけるトアリピは約500人であり、男300~400人、女100~200人という。ジョン・サルファ氏からの聞き取りによれば、彼らがはじめてポートモレスビーからラエへやってきたのは、1954年であり、そのときはジョン・サルファ、フィリップ・サルファ、ジョージ・メタ、ラコラ・ティモテ、の4人であった。彼らはいずれも設計士、大工、塗装工などの技術者たちであり、当時建設途上にあつたラエ市の諸々の建設の仕事に従事した。その後、1957年にポートモレスビーから大勢の彼らの仲間が来住し、1960年にはその数は300~500人に達したが、その後はあまり変わっていないようである。文献によれば、ラエのトアリピは約300人とも言われている（“Change and Movement” 1977 151 P）。こういうわけで、現在の彼らにも職業上の特性があり、大工、配管工、塗装工、運転手など建設関係の仕事に従事する者が多い。こうして彼らはある程度安定した仕事を持っているためか、現在、ロウ・カベナント地区の1つに居住している。近年ではケレマ又はポートモレスビーからの来住者はきわめて少なく、年間10人程度の者が一時的な訪問のためにここへ来て2~3日滞在の後また戻って行くという状況である。又、帰村を含めた転出者もほとんどいないという話であったが、個別調査の中で、間もなく母村へ帰るといふ例も

みられた。ここでの生活についてはコミュニティ費として、18歳以上の各人から毎月2キナ⁸⁾ずつ徴収し、諸々のコミュニティサービス例えば、水道、ヘルスセンターの維持などに使われている。又、葬式などの際は特別にお金を集め、こちらで小さなお別れの会をやった後、母村へ送られる者もいるという。以上が、この地区の主として聞き取りから判明する全体的な様子である。祭は、クリスマス、イースターなどキリスト教の祝祭日、独立記念日および年3～4回行われるシングシングなどで、これらは彼らだけが行うものではない。

2) Buko Settlement (以下B地区と略す)の概要

B地区は、大きく北側と南側の2つの部分に分けることができ、北側は主にモロベアンが南側はセピク出身者が多い地区になっている。リーダーのフィリップ・メバン氏によれば、B地区南側のセピク出身者の人口は約2800人程で、そのうちセピク川中流域のアンブンティ地域の出身者はセピク・リバー・ピープルと呼ばれ、ラエ市における彼らの数は700～800人(男400～500人、女300～400人)であるといわれる。母村のアンブンティには各々100～200世帯の2つの村があり、現在の総人口は1200～1300人である。

彼らの来住過程をみると、閉山まぎわの1964年頃に4人の者がブコロ金山に働きに来たことがはじめである。その後、1967～69年頃に、他の仕事や教育のためあるいは人を訪ねてという形でラエに来る者が増大し、彼らが次第に住み着くようになっていき、リバー・ピープルだけで1000人弱というような現在の数に達したのである。現在では、新たな流入定住者はあまりなく、母村から年に10～20人程度の者が、訪問の為にここへやって来るくらいである。

彼らの職業の特色は、それほど目立つ特色は見られないが、運転手、彫刻家などが多いほうであろう。とくに、彫刻家は彼らセピクの文化的特色として有名であり、その製品が民芸品店などで観光客等に販売されているが、都市における家庭の生計がこれで成り立つほどの職業とはなり得ていないようだ。しかし、自営的な仕事がほとんど存在しない状況の中では、注目すべき産業の1つではあろう。

彼らの社会生活については各世帯から、年間1.5キナの部落費を徴収しており、水道その他の諸費用に当てている。なお、彼らのステレオタイプについても尋ねたが、トアリピの方は「happy people」、セピクの方は「friendly」との答え程度であり、この点については、十分な追究は成し得なかった。

第2節 調査結果

筆者は調査票に基づき、両地区で各々10人程の世帯主を対象に面接、聞き取り調査を行ったが本節では両地区を比較しつつ、その結果を示すことにしよう。調査の内容は、1. ラエに来たことについて、2. 現在の生活について、3. 母村との関係についての3つに大きく分けられる。以下、これらについて見てゆこう。

1. ラエにきたことについて

1) 来住年 (第3-1表)

第3-1表 ラエへの来住年

来住年	P.	B.	計
1950-54	5		5
55-59	4		3
1960-64		2	2
65-69	2	2	4
1970-74		3	3
75-79		3	3
1980-84			
85-89			
計	10	10	20

まず、ラエにきた年についてみると、P地区では主に1950年代と60年代、とくに50年代に集中しているが、B地区では60年代と70年代に集中しており、さきに述べた来住傾向を実証している。なお、P地区では、プロロの金鉱山での労働や宣教師の仕事で戦時中に来たことがあったり、54年以前に来た者もいることが個別調査からわかった。

2) ラエ以前の居住地

つぎに、彼らがどこから来たのか、すなわちラエ以前の居住地についてみると、P地区では8人までがポートモレスビー、1人が母村から直接、1人がラバウルからであり、B地区では8人までが母村、1人がマダン、1人がマウントハーゲンで結果は対照的である。ただ、一般的には母村から直接という形態が普通であり、P地区の母村からは1人しかなく、ポートモレスビーからが多いというケースが特殊である。

3) 来住理由 (第3-2表)

第3-2表 来住理由

理 由	P.	B.	計
A. 転勤で	3	1	4
B. より良き 仕事を求めて	5	1	6
C. 求職で	2	8	10
計	10	10	20

上記の事情については、来住理由をみるとよりはっきりする。両地区とも全員が仕事のことで来ているが、その中を

A. 政府や会社の指示で移住した場合 (転勤)

B. 一定の仕事についていたが、よりよき仕事を求めて移住した場合

C. それ以前は村で生活していたか学生であって、はじめて都市の仕事を求めて移住した場合の3つに分けて整理すると、B地区ではCタイプがほとんどであるのに対し、P地区ではCタイプは少なく、BタイプやAタイプが多くなっており、ポートモレスビーからはよりよき仕事を求めて来た者が多いという事情が理解される。

4) 来住時の既住者 (第3-3表)

次に，ラエに来たときの状況についていくつか質問をした。まず，来たときに誰かいたか（誰

第3-3表 来住時の既住者

既住者	P.	B.	計
兄弟	3	4	7
その他の親戚	2	3	5
ワントーク	2	1	3
いない	2	2	4
不明	1		1
計	10	10	20

を頼って来たか) について尋ねた。

どちらの地区でも，まず「兄弟」次いで「その他の親戚」に頼るケースが多いことが明らかである。こうした人たちがいない場合は同じ「ワントーク」に頼ることになる。また，頼るべき人が「いない」というケースも多少あることもわかる。

5) 来住時に居住した家 (第3-4表)

第3-4表 来住時に居住した家

家の種類	P.	B.	計
兄弟	3	3	6
親戚	0	2	2
ワントーク	1	4	5
自分で作る	2	0	2
会社・政府・教会から	2	1	3
政府の青年の家	1	0	1
不明	1	0	1
計	10	10	20

都市へ来てただちに直面する問題は住居と仕事である。そこで，住む家をどうしたかを尋ねた。これによると，当然前表と似た傾向を示すが，P地区では彼らの有する能力や技術を生かして「自分で作る」があり，またB地区では「ワントーク」がかなり多いことが特徴的である。まず兄弟そして親戚であり，彼らがいなければワントークのどこへ行くのが一般的なパターンであり，B地区の場合がその例と言えよう。P地区の場合は自分で作ったり，会社，政府，教会など雇い主とも言うべき諸機関が家を供給するなど，やや特殊なケースと言えよう。

6) 求職の方法 (第3-5表)

第3-5表 求職の方法

求職の方法	P.	B.	計
自分で会社へ行き頼んだ	3	7	10
親戚の人が世話してくれた	1	1	2
友人(ワントーク)が見つけてくれた		1	1
転勤	1	1	2
技術者・職人	5		5
計	10	10	20

仕事については、どのようにして仕事をみつけたのかを尋ねた。B地区では自分で町へ出て会社に行き、その責任者に直接会って頼むという形がほとんどである。この場合一度で仕事が見つかったとの答えも1件だけあったが、多くの場合なかなかみつからず、何回もこれを繰り返したあと仕事にありつけるという場合が多い。P地区では前述のように大工、塗装、設計など技術をもった者が多く、これ以外の者はB地区とほぼ同様の傾向である。

以上、家と仕事についてまとめると、血縁関係者やワントークは家の方の世話はするが仕事についてはこれがなく、自分の力でみつけている場合が多いということになる。

7) 来住時の同伴者 (第3-6表)

第3-6表 来住時の同伴者

同 伴 者	P.	B.	計
一人	3	8	11
家族と (妻と)	1	1	2
(妻+子供と)	3		3
友人らと	3	1	4
計	10	10	20

以上のほか、移住時点およびそれ以前のことに関して若干の質問をした。その1つは、誰と一緒にラエへ来たか、すなわち来住時の同伴者についてである。結果は両地区で対照的であり、B地区では「1人」が圧倒的に多いのに対しP地区では1人で来たケースは相対的に少なく、「家族と」や「友人らと」という形態が多くなっている。ここでもP地区のケースがやや特殊であり、B地区の場合が一般的なようである。

8) 来住時点での困難

次に、「来た当時何か困ったことはなかったか」について尋ねたが、P地区の1人がこの地のローカルピープル (先住者) と多少トラブルがあったと答えた他は、全員が「なし」であった。

9) 母村や前住地での仕事 (第3-7表)

第3-7表 母村での仕事

仕 事	P.	B.	計
village life	6	7	13
学生	2	3	5
子供	2		2
計	10	10	20

さらに、ここへ来る前の村や前住地ではどんな仕事をしてきたかを尋ねた。

母村では子供か学生を除くと全員が「village life」すなわち村での自給自足的な生活をしてきたことになる。P地区の人々はケレマから直接ラエへ来た者は1人のみであり、他の大部分はポートモレスビーから来ている。この9人について、前住地 (8人はポートモレスビー、1人はラバウル) での仕事をみると、大工等の職人3、単純雇用者2、学生4となり、ラエでの職とはほぼ同様の傾向である。

10) 移住の経験

最後に移住の経験を尋ねた結果をみると、B地区では8人までが「なし」であり、残りの2人のうち1人はウェワク（1966）→ポートモレスビー（1967）→マウントハーゲン（1967）→ラエ（1970）という移動を、1人はウェワク（1947）→マダン（1950）→ラエ（1962）という経験をしていて、いずれも、まず母村の県都であるウェワクへ出、その後ラエへ来ている。

他方、P地区では全員がポートモレスビー居住の経験を持ち（ケレマから直接ラエへ来た者も、その前にポートモレスビー居住の経験を持っている）、うち7人はその後直接ラエへ来ている。すなわち、この7人はケレマ→ポートモレスビー→ラエという移住パターンである。残り3人のうち1人はポートモレスビー（1950）→ゴロカ（1952）→ケレマを、別の1人はポートモレスビー（？）→ワウ（1942）→ケレマ（？）→ポートモレスビーを、最後の人はポートモレスビー（1963）→ラバウル（1964）をそれぞれ経由してラエへ来ている。

以上のことから、B地区では移住経験がなく直接来たケースが多いのに対し、P地区ではポートモレスビー経由者が大多数であるという結果がわかったが、このほか各地を移動している者も多少いること、その場合、はじめは近くの都会に出て、そこからさらに遠方の都会へ移るという傾向があることも指摘されよう。

2. 現在の生活について

1) 被調査者の年齢（第3-8表）

第3-8表 被調査者の年齢

	P.	B.	計
60代	3		3
50代	4	1	5
40代	2	3	5
30代	1	3	4
20代		3	3
計	10	10	20

まず、調査対象者の年齢をみておこう。世帯主を対象としたので全員が男性である。

P地区では40～60代がほとんどであるのに対し、B地区では20～40代が中心であり、年齢層にかなりの違いがある。ラエへの移住は双方とも年齢の若い時期に行っているため、この差は来住時の差を反映しているといえよう。

2) 住所について

P地区は前述のようにロー・カベナント地区にあり、B地区はいわゆる squatter settlement であって、この違いが住所にも反映している。すなわち、P地区の居住者にはそれぞれ1軒毎に異なる P.O.Box の番号が決められているのに対し、B地区の方はほぼ全員が P.O.Box 3 であって区別されていない。

3) 職業について (第3-9表)

第3-9表 職業

P.		B.	
大工	5	運転手	2
溶接工	1	オペレーター	1
設計人	1	波止場事務官	1
カカオ農夫	1	労働者	1
宣教師	1	守衛	1
引退者	1	事務所清掃人	1
		無職	3
計	10	計	10

次に現在の職業についてみると、P地区では大工5人、建設関係全体では7人と技術的職業が卓越しているのに対し、B地区ではバラバラであり、また無職も3人いる。筆者は調査対象者の選択をリーダーのフィリップ・メバン氏に依頼したが、こうした方法では被調査者が地位や職のある者選ばれやすいことを考慮すると、全体的にはもっと無職が多くなることも予測される。とくに、ハイランドからのより新しく形成された squatter settlement では無職の比率はもっと高くなるだろう。

4) 家族数について

次に家族数についてみると、両地区とも子供の数は0から10人の間であり、平均するとP地区では5.2人、B地区では5.1人とどちらも5人強であった。この数はセンサスの国全体の平均ともほぼ同じ数である。

5) 妻の出身地 (第3-10表)

調査対象者は1人を除き全員が妻帯者であったが、その妻の出身地についてみると、全体とし

第3-10表 妻の出身地

出身地	P.	B.	計
夫と同じ村	7	6	13
母村近くの村	2	0	2
その他	1	4	5
計	10	10	20

注：P地区のその他1は E.H.,
B地区のその他4は Morobe 3 E.H. 1

では「夫と同じ村」が最も多い。これ以外についてみると、P地区では「母村近くの村」が多いのに対し、B地区では「その他」すなわち、ラエ地区先住者との婚姻が少なくないことが目立っている。これは来住時期の違いの他、ラエ市先住者は同じニューギニア人同士である等の民族性の問題も関わっているかも知れない。

3. 母村との関係

最後に、彼らの母村との関係についてみよう。

1) 帰村回数 (第3-11表)

まず、彼らがどのくらい母村に帰っているかをみると、両地区では多少違いがあり、P地区で

は10年に1回程度帰村するケースが最も多く、次いで2～3年以内に1度となっているが、B地区では「ほとんど帰らぬ」が多く、「10年に1回」をあわせると両者でほとんどを占めていて、帰村は意外に少ないと言えよう。しかし、このことは母村との関係が弱いことを必ずしも意味しないことが以下のことから明らかである。

第3-11表 帰村回数

帰村回数	P.	B.	計
年に1-2回	1	0	1
2-3年に1回	2	0	2
5年に1回	0	1	1
10年に1回	5	2	7
ほとんど帰らぬ	2	7	9
計	10	10	20

2) 母村への金品の送付 (第3-12表)

第3-12表 母村への金品の送付

頻度	P.	B.	計
持って行く	1	0	1
月に1回	1	0	1
2カ月に1回	0	2	2
3-4カ月に1回	1	1	2
6カ月に1回	0	3	3
年に1回	0	1	1
送らない	4	2	6
送るべき人なし	1	0	1
不明	2	1	3
計	10	10	20

すなわち、金銭や物品を母村へ送る頻度について尋ねると、P地区では「送らない」者も少ないが、B地区では少なくとも年に1回以上送っている者が多数であることがわかる。なお、送るものの内容では金銭が多かったが、P地区の中には衣類を送るとの答えもあった。

3) 母村への手紙の回数 (第3-13表)

第3-13表 母村への手紙の回数

回数	P.	B.	計
年に5-6回	1	3	4
年に3-4回	4	5	9
年に1-2回	3	1	4
しない	2	0	2
計	10	9	19

注：B.の一人は電話

さらに、手紙、電話などの情報の交換についてみると、電話で行うという者がB地区に1人いた他はすべて手紙であった。この頻度は両地区とも「年に3～4回」が多く、両地区を比べるとB地区の人々の方が帰村こそ少ないものの、金品の送付や情報の点で、母村との関係がより密であると言えよう。これは彼等の年齢や来住時期の新しさのせいかも知れない。

3) 将来の帰村の意志 (第3-14表)

最後に、将来母村に帰るつもりか、それともここに定住するつもりかを尋ねた。

第3-14表 将来の帰村の意志

	P.	B.	計
ここに定住する	4	2	6
村に帰る	5	3	8
未定	1	5	6
計	10	10	20

これによると「ラエに定住する」という者も少なくないが、最も多いのは「村に帰る」という答えであった。さらにその理由をみると、「都市生活ははじめは良かったが今はよくない」とか「ラエは楽しくない」、「自分は村の生活が好きだ」といった都市生活よりも村の生活の方が楽しく住みやすいという彼らの声が聞かれる。さらに、「年をとったので」とか「村は我々の土地だから」などの声もあった。また、P地区の未定の1人も「いまは決めていないが、将来はたぶん村へ帰る」と答えており、全体として村へ帰りたいたいという意向が強く感じられる。

なお、「村へ帰る」と答えた者の中には帰村の時期まで決めている者もあり、P地区の5人中で1人は今年、1人は2年後、1人は3年後に、またB地区の3人中の1人が来年とそれぞれ答えているので、かなり確実性が高いものと判断される。また、B地区に「未定」が多いのは、まだ20~30代の若い者が多いためであろう。一般に、村へ帰りたいたいという傾向は高齢者ほど強いようである。

4) 将来の希望

アンケートの最後に、「将来何になりたいか、どういう仕事をしたいか」という将来の希望について尋ねたところ、P地区では①カカオ農場を子供に残したい、②コプラビジネス、③村での養鶏、④人を雇用する雇用者として生活したい、⑤村で家を建て金をためたい、などのかなり積極的なものと、⑥援助がなければ何もできない、⑦すでに十分したので何もない、⑧別に計画はない、⑨将来のことは考えず今のこと (mission) に全力をつくすなど、とくに大きな希望をもっていない者との2つに分かれたが、B地区では9人が「別にない」、残りの1人も「まだ考えていない」との答えで対照的であった。これは一定の経済的基盤をもつP地区と、そうではないB地区との差であろうか。ただ全体的にみても、将来の希望や計画についてはその展望が持てないためか、積極的な姿勢が多少弱いように感じられた。

第4章 まとめと考察

第1節 ラエにおける移住者増加の時期区分

まず、ラエにおける移住、都市化のプロセスについて整理しておきたい。ラエにおける移住者増加の過程を時期的にみると、次の3つの段階に区分できるのではないかと思う。

その第1段階は、1950年代から60年代にかけてのパプア人の移住に代表される段階である。彼らの多くは、大工等の一定の技術を身につけており、一時はポートモレスビーに居住していたが、当時開発が進められていて、よりよき仕事の機会が見いだせたラエに移ってきた人達である。こうした特性から、彼らの多くは現在P地区を中心としたロー・カベナント地区に居住している。

第2段階は、1960年代から70年代にかけて、ラエ市の産業とくに軽工業の活性化に伴って移住して来た人達であり、この中には、モロベ出身者、セピク出身者、ハイランド地方出身者などが主であった。彼らのほとんどは技術を持たず、squatter settlementといわれる移住者集落とくにB地区およびバンダリー・ロード地区に居住しており、仕事の面では、彼らの来住当時はまだその就業機会が見い出せた時期であったと言えよう。

また、この時期はラエ市に隣接するブティバム Village など urban village 内外の customary land 内にも移住者が居住するようになってきており、B地区もこの一例である。

第3段階は、1980年代の主としてハイランド地方からの移住者が急増する時期である。彼らの大部分はバンダリー・ロード地区やハンランド・ハイウェイ沿線の squatter settlement 内の親戚や同一ワントークの家またはその床下に居住し、仕事もほとんどないという人達である。また urban village ではとくにカムクムン Village 内外に移住者の増加が顕著である。

筆者はこの第1段階の移住者の例としてP地区を、第2段階の例としてB地区をそれぞれ選択したわけであるが、第3段階の移住者については間接的な聞き取りしか行い得なかった。

第2節 若干の考察

調査結果については前章で述べたので、最後に移住に関連した2～3の問題を取り上げるという形で若干の考察をしておきたい。

第1は、都会の居住状況が悪く、仕事もなかなか見つからないにも関わらず、なぜ彼らの移住の流れが絶えないのかについてである。

この点は既述の確認となるが、10代や20代の若者達にとって、都市的生活の魅力、それと比較しての village life の単調さにつきるようである。ただ、彼らが都会生活に満足しているか否かははなはだ疑問であり、このことは将来の住みたい場所として母村をあげている場合がかなりあることから裏付けられよう。

第2は土地問題である。一般に、都市部はかつて植民地時代に植民当局が住民から買い上げた government land から成っているが、都市境界内部でも買い上げが行われていない地元民の土地も残っており、他方、実質的な都市域は市域境界にかかわりなく、連続して市域外にも拡大、進展している。

この government land の広さは都市により違いがあって、例えばポートモレスビーではかなり広い政府有地が存在するが、ラエでは狭い。このため、政府や行政の側では、ラエ市の産業活動や人口の増加に伴い、さらに政府の土地を拡大する意向を持っているが、住民の側はなかなか応じよ

うとはしていない。

移住者は、市域内のおよび隣接の customary land に居住する場合は、この土地の所有者たる village に対して借地料を支払うが、政府の土地の場合には、支払うことが決められてはいても、実際にはほとんど支払われていないといわれる(相原氏からの聞き取り)。

政府の土地における地代の徴収という点では、移住者の settlement どころか、ロー・カベナント地区ですらその徴収が十分には行われていないという実態もあるようだ。

第3は自営的経営の弱さの問題である。彼らの職業をみると、自営業的なものは小さな商店経営とごく一部の者が行うプランテーション経営程度であり、きわめて弱いことを強く感ずる。この状態は東南アジア諸国の場合と比べても、その基盤ははるかに弱いと言えよう。工場のほとんどすべてやスーパーなどを含む商店の多くはみな外国人⁹⁾経営であり、この国の人々はそこで働いて給料を得てはいても、経営者たる者はほとんどいないのである。さらに、小さな商店の経営についても、開業はするがその経営が長続きしない例も少なくないといわれる。

ここには彼らの社会の次のような特質がからんでいる。すなわち、金が貯ると親戚やワントークが寄ってきて、貯めた者はそれを皆に分け与えなければならないといういわば共同体的社会の論理が強く働いていることである。言い換えると、village life の考え方や行動が都市部においてもそのまま引き継がれており、このことは何も経営体に限らず、給料取りの家庭においても同様である。

このような社会における経済発展については国の自立はいかにあるべきなのであろうか。世界史的には高度に発展した工業化社会の中における共同体社会の発展の問題が、ここには提示されていると言えよう¹⁰⁾。こうした社会の発展の方向としては、例えば次の2つの方向が考えられよう。その1つは、個々の自営業の発展をはかって個別経営体を強化するいわば資本主義的発達の方であり、もう1つは、この共同体社会の特質を生かす形で共同社会または国家を中心として社会の発展を図る道である。PNG がどのような方向を取るべきなのかは更に詳細な検討が必要であらうが、この点については、本稿ではこのくらいにとどめておく。

ただ、社会のこうした共同体的性格が都市部においても今なお強く働いているとは言え、以下のような共同体社会がくずれつつある現象も他方では見られることも注目に値しよう。

すなわち、

- ①都市化の進展により、village life から離れた都市居住者の増大およびあまり帰村しないという彼等の実態。
- ②都市部における別の異なるワントークとの婚姻の増加傾向。
- ③将来、事業をめざそうとする者の一定数の存在。
- ④さらに、筆者が先に調査したマーケットにおける商業主義の発達¹¹⁾。

こうした現実の実態やその変化については、今後もさらに注意深く観察、分析していくことが必要であらう。

謝 辞

本研究を進めるに当り，モロベプロビンス研究委員会の Benson Nable 氏，Arena Sesiguoc 氏，Kwaslim Kauc 氏，Veronica Toloube 女氏に諸資料の提供や調査の便宜の面で大変世話になった。また，調査集落のリーダーである John Sarufa 氏，および Philip Mevan 氏にも調査の際に大変協力していただいた。この他，ラエ市在住の日本人宣教師の相原雄二氏および氏を紹介して下さったジャイカの嘉山勉氏にもお世話になった。とくに相原氏には，現地での長期に渡る諸活動を基盤にした的確な教示を受けただけでなく，資料や文献の紹介，集落現地の案内など大変親切な御協力をいただいた。以上の方々および筆者の面接調査に快く応じて下さった調査集落の方々に厚く御礼申し上げます。

注

- 1) 同一言語を話す人々の集団。なお，この問題については Levine (1979) が参考になる。
- 2) 都市内部に古くから存在する地元民の集落。
- 3) 近年の移住者により形成された集落。
- 4) 筆者に教示してくれたラエ居住の日本人宣教師。
- 5) 高野史男は居住分離と訳している。日本地誌研究所編 (1989)。
- 6) 慣習的に存在してきた共有地。
- 7) 国が主として前宗主国などから迎え入れている上級公務員などの外国人雇用者のこと。旧宗主国とのパイプ役なども果している。
- 8) 1 キナは約170円。
- 9) 白人の他，中国人も少なくない。またフィリピン人も入って来ていると言われる。
- 10) この問題はアフリカ社会にも共通する問題と言えよう。
- 11) 拙稿 (1985) 参照。

文 献

- 日本地誌研究所 (1989) : 地理学辞典，改訂版。二宮書店 803ページ。
- Chao, J.P. (1985) : Life in a Squatter Settlement. Catalyst 15-3, 168-207.
- Groningen a Stuling, D. H. (1980) : Migration of the Kilenge : a Village Study. Yagl-Ambu 7-2, 33-46.
- Jackson, R. ed. (1976) : Urban Geography of Papua New Guinea, University of Papua New Guinea, 493 P.
- Levine, H.B. & Levine, M.W. (1979) : Urbanization in Papua New Guinea. Cambridge University Press, 161 P.
- May, R.J. ed. (1977) : Change and Movement. Australian National University Press, 284 P.
- Tajima, Y. (1985) : Marketing in Papua New Guinea. Memoirs of the Kagoshima University Research Center for the South Pacific 6-2, 175-186.
- White, P. & Woods, R. (1980) : The Geographical Impact of Migration. Longman London, 245 P.